

# 小木曾 洋司 ゼミ

## 教員の研究関心領域

現代社会において、「地域の再生」という話題があちこちで聞かれるようになった。しかし「地域」「地域社会」「コミュニティ」と言われる対象は論者によって意味も使用法も異なる。それは、戦後の経済発展が地域社会の空間的枠組みを壊し、地域で時間を過ごす、あるいは社会関係や人間関係を紡ぐことの意味を無効にしてきたからである。したがって地域の再生とはそうした生き方の変更を意味する。現代は、戦後、生きる場所であり、生活を形づくる堅い枠組みであると信じられていた家族・企業・国民国家がそうではないことを日々われわれに突きつけている。地域はそのような綻びを修復する糸口なのか、それとも異なる生き方の構築する基盤たりえるものなのか、しばらくは観察するしかない。

## 4年までのテーマ・方針・内容

ゼミⅠ：地縁社会、例えばムラ社会に関する文献を共通テキストとして読み、そこに生きる人々の関係性や暮らし方・感じ方、そして共通の空間で共に生きる知恵などを議論したうえで、それを素材にエッセイをつくる。  
ゼミⅡ：現代の公共性の担い手としての地縁関係のあり方と意味の探求。現代の住民によるまちづくり、住民活動の意味を文献を通して考える。エッセイを作成。  
ゼミⅢ：卒論、またはゼミ論の作成をおこなう。

## 卒業論文のタイトル例

- \*「市民参加型まつり」
- \*「地方自治体運営の新たな方法と課題ー愛知県一宮市1%条例の試み」
- \*「地域自治区の実態につかんする調査研究ー豊田市足助地区 椿立地域づくり委員会の事例を通してー」
- \*「馬籠宿-テーマパークの先駆-」
- \*「新しい公共交通の形成スキーム-豊田市高岡地区の事例から」
- \*「観光地としての地域づくりにおける合意形成プロセスの地域間格差-上宝村における地域おこしの事例から-」
- \*「地域住民による地域活性化政策-なぜ道の駅は増加したのか-」
- \*「プロレス論-戦後プロ興行スポーツ の変容-」
- \*「ユニークフェイス」、「新たな学校の試み-東京シューレの考察」

### 成績評価 基準・方法

出席を重視する。論文も調査も問題意識、課題の設定の仕方が最も大切。これがしっかりしていないとレポートを書く時、本の文章を丸写しにするか、混乱するかのどちらかである。課題設定が適切に組み立てられているか、ユニークか、奥行きがあるか、この点についてはいつも言及、議論をしたい。そうした作業ができることを評価する。

### 自己紹介 こんな学生を歓迎

大学院時代から調査(ばかり)を続けたが、その後10年くらいしない時期があつて4年前から再び地域社会に入り込むようになった。地域づくりを担っている人たちはユニークで、寛容だ。地域をよくするためには人と合意をつくらねばならず、そのためにはお互いの長所を引っ張り出すことが必要であり、相手を信頼しなくてはならない。それゆえ、調査者である我々にも、特別な利益もないのにつきあってくれる。人とのコミュニケーションそのものが大事なのであろう。そういう人たちの感性や考え方の中に、「信頼関係」の成り立ちを探ってみたいと考えている。

## 演習Ⅰ 地域社会に生きるとは

### 内容 スケジュール

まず高度成長以前の地域社会を学ぶ。宮本常一『家郷の訓』などを共通テキストにして、地域の社会関係がもっている構造と機能、そしてそこで生きる人々にとっての意味を考える。例えば、「歌」、誰がどんなところで、どんなふうにか歌っていたか、それは労働歌であったり、娯楽であったり……。そこから現代社会を考えると「今」の社会関係が見えてくる。後半は現代的な地域社会の状況を「再生」をテーマにした文献でみていく。

### その他

テキストについては何年かごとに変えている。エッセイの作成にあたって先輩たちのエッセイを紹介する。テキストを読むにあたっては、各自の担当部分のレジメをつくって報告してもらう。

## 演習Ⅱ テーマ： 現代のまちづくりと地域集団

### 内容 スケジュール

地域づくりの動きは様々な集団の形成という形で現れている。NPO(非営利団体)などはその典型である。そうした様々な地域集団による地域作りのケーススタディを文献によって検討する。その際に、「協働」という地域集団間の連携や住民一行政の連携という点に注目する。また実際の地域づくりを担う集団を訪問する機会を年に1回は設定し、訪問する。対象として設定する。訪問後、訪問記を作成する。ゼミⅡは4年に向けて、論文作成の基本的な力をつける訓練をしなければならないので、読む、考える、書く、という作業を重視する。

### その他

訪問に関しては、講義外になること、交通費は自己負担になる。

## 演習Ⅲ テーマ： 論文を作成する

### 内容 スケジュール

ゼミ論または卒論を個別に作成する(もちろん共同論文でもよいが、執筆担当を明確にする)。先にも書いたが、大切なのは課題の設定の仕方だ。それを左右するのは知識とどれほどよく考えたかである。この点を中心に個別指導していく。その課題をどう解くか、その第一歩が卒論であり、ゼミ論。その課題を卒業後ももちつづけられるように大きな課題を見つけてほしい。

### その他

4年生は就職活動もあつてたいへんだが、毎日少しずつでも作成作業を進めるそうした生活リズムをつくることも覚えてほしい。